

# 農村と山村の狭間で

清家政信

### ●はじめに

私は政府開発援助（ODA）の技術協力を担う国際協力機構（JICA）で、国際協力専門員として仕事をしている。私自身は研究者ではなく、あくまで実務者である。国際協力専門員は、開発途上国で自ら開発プロジェクトの実施に当たることもあれば、プロジェクトの重要な局面で評価ミッションに参加することもある。一方、日本国内での中心業務のひとつは研修事業である。日本人を対象にした研修コースもあるが、開発途上国から招いた研修員に対して我が国の開発経験の講義をしたり、農村視察に同行する機会が多い。本稿ではそうした実務者の立場から、ここ数年の私自身の活動を通して開発援助と農村研究について思うところを述べたい。開発援助の世界に入ってもまだ日の浅い、若い世代を讀者として念頭に置くことをお断りしておきたい。

### ●開発援助と農村研究

個人で起業するのであれば、勘や思い入れで走り出すのもよい。事業の成否は市場

が断を下し、上手く行けば創業者利益を得られるであろうし、逆に失敗すれば事業主体としての結果責任を負うことになる。民間事業の始まりには、多かれ少なかれ、こういう面がある。一方、行政の仕事は性格が異なる。事業目的を達成するためのインプット（投入）とアウトプット（成果）の関係性にあらかじめ明確な論理があつて、はじめて公金を使う合理性が認められるのが本筋である。JICAが実施する開発援助事業にも、当然こういった論理性が求められる。

開発援助の潮流は、従来のマクロレベルを対象とした援助だけでなく、貧困削減や人間の安全保障といった価値観のもとで、地方自治体などのメゾレベル、村落コミュニティなどのミクロレベルへの直接的な働きかけを重視する広がりを見せている。一般に、ある社会とその外部の者との関わりあう時、外部者がその社会のなかで公平であり続けるのは、仮にそう意図したとしても容易なことではない。我々JICAの立場にあつては、なおさらである。農村社会の生業は、農業だけではない。また、そこ

に住む人々には老若男女を含めて多様なプロフィールがある。開発援助を通して何らかの技術を導入したり資金を提供したりすることは、その社会のあり様に応じて、そこに住む人々に様々な異なる効果とインパクトを及ぼし得る行為にはかならない。ODAを取り巻く環境変化の中で、これまでに以上に農村開発と農村研究のつながりが求められている。なぜなら論理を構築する作業プロセスは、農村社会のあり様を知らずして前には進まないからである。

では、我々実務者は開発援助の対象となる農村社会について、どれほどよく知っているだろうか。都市と農村を軸にして、これを少し詳しく考えてみよう。

### ●都市と農村

おおよそ都市というのは大きな河川のおかげにあつて、水の豊富な沿岸部の平野に形成されている。都市はどれも似た景観を持つ。そこには人が集まっついて、人口密度が高い。都市には高度に分業化された職業人達が住み、自らの世帯の労働力、資金、土地を、それぞれの市場（マーケット）を



ミャンマー・コーカン特別区の少数民族

通して取引しながら生計を立てている。匿名性が高いので、自由度も高い。「隣はなにをする人ぞ」である。多様な価値観が混在する社会が形成されているので、ある世帯や集団にとって必要なものが、別の人たちにはまったく必要がない。だから、物事を決めるときには、多数決が基本的な手段となる。

対して、農村は一樣ではない。農村は国によっても、ひとつの国の中でも、景観や立地が多様である。平野部だけでなく、山の中にも沿岸部にも広く存在し、土壌や日照時間などの自然環境も様々である。人口密度は低い。世帯は自らの資源を組み合わせて生産活動に投入する。農村の住民はお互いのことを良く知り、匿名性は限りなく

低く、相互依存と相互監視が表裏一体となった窮屈な生活環境がある。専門職としての分業化のレベルは低く、むしろジェンダーや世代、社会階層といった社会文化的な分業が生活の枠組みを形成していて、意思決定のあり方にも、こういった社会の固有要因が反映される。昨日や今日に、そうなるかを選択してそうだったのではない。長い時間をかけて、そうなっている。

今日に生きる日本人の多くは、都市的な環境で生まれ育っている。研究者であれ実務者であれ、開発援助に関わる者も例外ではない。自らの地域社会との関わりは、希薄であることが多い。たとえば、八王子の自宅マンションから新宿のJICA本部に勤めているとすると、新宿の街はよく知っていても、八王子の地域社会（マンションの自治会かもしれない）の事情はまったく知らない。自らが居を構える地域に帰属意識を持つ機会さえない。多くの開発途上国においても、中央官庁のエリート官僚は我々と同じような育ち方をしている。彼等もはや田舎から出て来たエリートではなく、都会育ちのエリートに他ならない。こうした援助する側とされる側双方で、地域社会との濃密な関わりや「田舎感覚」の欠落した者同士が農村開発や地域社会開発のプロジェクトに関わるのが実情である。都市的な環境で育った者が農村開発の実務の現場経験だけに頼っていたのでは、論理構築能力は育たない。地域研究を中心として、幸

我が国には農村研究の十分な蓄積がある。実務者として空理空論に振り回されたいくれば、この「知の宝庫」に道標を求めることである。その努力を厭わない者だけが、困窮している他者の役に立つ仕事をする名誉ある資格を得ることが出来る。

### ●農村と山村

一般に中央の行政は、先に述べたような農村の多様性と付き合うのが得意ではない。すべからず、全国一律の基準を当てはめようとすることが多い。実務者としての私が知る限り、農村に万国共通の定義はない。センサスなどで Urban と Rural が区別されていることもあるが、Rural がさらに何らかの基準で細分化されていることはどうやらないようである。日本の場合にはどうだろうか。

ここで私が問いかけたのは、林学はさておき、日本は山国なのに山村社会のことはあまり研究されていないのではないかとということである。稲作を基本的な生活体系として持つ平地の農村と、そうではない生活体系を持つ山村とは区別して取り扱うのが妥当ではなからうか。何故そんなことが大事かという点、援助の対象に直接働きかけるタイプの取り組みが増えつつある昨今の開発援助の潮流のなかで、その対象となる人々は山間部のさらに奥まった辺境地の山村にいるからである。JICAのプロジェクトでは、ミャンマーのコーカン特別区



「彩」のパッケージング作業

今の日本の山村には、例外なく過疎と高齢化社会という看板がかかっている。すなわち、昔は過疎でもなければ、きれいな裾野を持つ人口ピラミッドが描かれる山村社会があったというところである。しかし、山村社会の変容と生活実態を、我々ほどの



横石氏と「彩」農家を訪ねて

で実施している「麻葉撲滅・貧困削減プロジェクト」、メキシコ・ソコヌスコ地域での「小規模生産者支援プロジェクト」、パナマでの「中山間地における持続的農村開発普及プロジェクト」などが、その代表的な事例である。

程度知っているのだろうか。ちなみにインターネットで検索してみると、農村研究の五九三〇件に対して、山村研究はわずかに三五三件がヒットするに過ぎない。自らが開発途上国に赴いたとき、最終的な拠り所になるのは日本の経験である。それは、過去の出来事だけではなく、今日もおこの国のあちこちで積み重ねられている経験という。自分の国のことをよく知りもしないで、どうして他国の役に立てようか。それを知らずして、上のような辺境地での開発援助事業にどれほどの骨が通るだろうか。「東南アジアの農業問題を考えるには、まず、日本の農業問題をおさえておかななくてはならない。日本の農業を知らずに、よその国のことなんかわかるはずがありませんからね」(参考文献①) という滝川勉氏の立場と同じである。

### ●徳島県の山里を訪ねて

このような立場に立つ者にとって、山村研究が十分でないことは頭痛の種となる。先にも述べたように、われわれが実施する開発援助プロジェクトには、インプットとアウトプットの間に論理性が不可欠であり、その論理性を探る道標は、この場合、山村研究の蓄積にあるからである。代替手段として考えられる現実的なアプローチは、研究の蓄積が十分でないのなら、自ら山村に出向いてその現況を観察することである。私の行き先は故郷徳島県、葉っぱビジネ

ス「彩」(いろどり)で名高い上勝(かみかつ)町である。徳島市から南西部に向かつて車で約一時間、人口二一〇〇人あまりの山里である。毎年、この町をその人口をはるかに越える数の視察者(観光客ではない)が訪れている。日本国内からの視察者だけではない。世界中から来る。ここでは葉っぱが資源だからである。

「彩」の概要を簡単に紹介しておこう。和食は、料理そのものだけでなく、器と季節感を演出するツマ物が三位一体となって完成する。昔、まだ日本が田舎だらけだった頃には、修行中の若い料理人が、春なら柚子の花やふきのとう、初夏になれば紫陽花、暑い盛りには笹の葉やつるむらさき、それを過ぎれば色づいた柿の葉やもみじといった歳時記にある山野の彩を自らが採取していたらしい。こういった植物が身近な環境から徐々に姿を消しつつある。「彩」はこのツマ物の市場性に着目し、今では年商二・五億円を上げるまでに成長している。葉っぱを出荷する「彩」農家は一七七名。女性中心で、その平均年齢は六八歳である。昭和五三年に徳島市から上勝へ赴任してきた農協の営農普及員、横石知二氏。当時の町長には、外から人を入れないとこの町は変わらないという強い思いがあった。農協と町が給与を折半することで、新卒の横石氏の採用が決まった。主産物の柑橘類は水分が多く、重い。年配者には農作業が重労働だった。農家と顔をあわせては、嘆き





## 特集／農村開発と農村研究

節に付き合う毎日だった。過疎の進む町には活気がなかった。ある日、日本料理屋に入った横石氏の隣の席で、若い女性客のグループが歓声を上げているのが耳に入った。「うわあ、このモミジきれいやわ!」、ほおずきって可愛いわあ!。彼女たちの歓声は料理に対してではなく、ツマ物の可憐さ、美しさに向けられていた。「これだ!」

葉っぱなら、上勝の山になんほでもある!」、この横石氏の直感が上勝町の「彩」の原点である。最初は、五円、一〇円でしか売れなかった。「葉っぱが売れるのなら、秋田町（徳島市の飲み屋街）を逆立ちして歩いてやるわ」、「よそ者は出て行け」と揶揄された。しかし、料亭で集めた横石氏の市場情報が、徐々に上勝の葉っぱを商品に変えた。「彩」が扱うのは、葉っぱだ。軽くてきれいだ。年配の女性たちが、徐々に「彩」の魅力に染まった。山の葉っぱが変わったのではない。山は昔からそこに泰然としてあるままだ。変わったのは、上勝の人たちの山を見る目である。「彩」は眠っていた地域資源の商品化に成功しただけではない。上勝から嘆き節を追い払った。簡単に述べれば、「彩」は、こういう事業である（参考文献②）。

「彩」が我々に示すところは多岐に渡る。特に「よそ者は出て行け」という上勝の人たちの厳しい初期反応に、JICA事業への強い示唆を看取したい。われわれ開発援助の実務者は、外に出れば常に「よそ者」

である。そのよそ者に能力がなければ、「出て行け」と言われて当たり前、たまたま「開発援助」という資源を持っているから、表向き歓迎されているだけだ。我々に求められているのは、能力をもってその資源を生かすことである。

### ●おわりに

私のアプローチは、研究者としてのアプローチではない。山村社会の研究蓄積が乏しい環境での、実務者なりの「走りながら」の作業である。何故走って急ぐのか。それは、昭和期山村変容の生き証人、すなわち山村のお年寄りたちから直接に聴き取りをする時間が、残念ながら残されていないからである。昨年からは、同じ徳島県の祖谷（いや）地方にも足を運んでいる。日本の三大秘境のひとつと謳われ、平家落人伝説やかずら橋といった観光資源に恵まれている。祖谷の環境も開発のあり方も、この地方独特のものがある。上勝と祖谷、このふたつの山里の変容を比較することによって、私なりに開発援助への多くの示唆を得つつある。

平成一八年が明けて三月までに、すでに二度、ミャンマー、バングラデシュ、フィリピンのJICA研修員と一緒に上勝を訪ねた。彼らが示した反応過程に共通するのは、まず「葉っぱが売れるわけがない」と、その意外性に驚いて興味を示し、そして次には「これは日本の食文化の賜物だ。日本

でしかできない」と諦めることである。最初の意外性が強烈なだけに、この諦めの気持ちは良く理解できる。しかし研修の目的は、彼らの国々でいかにして「彩」をやるかではない。「彩」は日本文化が始めたのではない。もしそうであれば、年間数千人に及ぶ視察者を通して日本中の山村で「彩」の成功物語がすでに花咲いているはずだ。成功事業としての「彩」に惹きつけられるあまり、彼らの目から「人」が欠落してしまうのである。横石氏と上勝の農家が、農協や町行政の支持を得ながら起業して、苦労に苦労を重ねた末に成功したのが「彩」である。横石氏や農家のお年寄り、笠松和市現町長といった今を生きる方々が、その過程での苦労話を研修員たちに厭うことなく聞かせてくれる。そして、それは研修員に対してだけではなく、我々開発援助に携わる実務者にとっても、研究蓄積を代替して余りある最高の貴重な教材であることは言うまでもないだろう。

（きよか まさのぶ／国際協力機構国際協力総合研修所国際協力専門員）

### 《参考文献》

- ①「座談会―アジアの農村研究と農業問題」（『アジア研ワールド・トレンド』第三四号、一九九八年五月）。
- ②「彩―木の葉の里の元気づくり」（JICAマルチメディア教材、二〇〇五年一〇月）。